

1920年代のハンネス・マイヤーの「集団 (Kollektiv)」概念について

岩澤龍彦

はじめに

本論文では、ハンネス・マイヤー (Hannes Meyer, 1889-1954、以下「マイヤー」とする) の1920年代の活動を、「集団 (Kollektiv)」という概念を中心に整理する。なぜ「集団」に着目しなければならないのか。マイヤー自身が1920年代末に自身の活動の基礎を特徴づける際に、「集団」という語を用いていたためである。1927年4月1日にバウハウスに新設された建築科に就任したマイヤーは就任前に、当時のバウハウスの校長、ヴァルター・グロピウス (Walter Gropius, 1883-1969) に次のように書き送っている。

「紛れもない「集団主義者」(kollektivist)としての私は労働共同体内での共働 (mitarbeit) に惹かれています。」⁽¹⁾

「私の授業の基本的傾向は「ABC」、そして「新しい世界」(die neue welt)の意味で、完全に機能的—集団主義的—構築的 (funktionell-kollektivistisch-konstruktiv) なものです。」⁽²⁾

この二つの引用から明らかなように、マイヤーは自身を「集団主義者」として、自身の展開する授業を「集団主義的」として特徴づけている。後者においてはさらに、マイヤーが1926年に編集を務めたスイスの雑誌『ABC: 建設への寄与 (ABC: Beiträge zum Bauen)』(以下『ABC』とする) という意味での集団主義、そして、同年に発表したテキスト、「新しい世界」における意味での「集団主義」、と補われている。このことからマイヤーの1920年代の活動を理解するためには彼が「集団 (主義)」をどのように理解していたのか、を明らかにする必要がある。

1920年代のハンネス・マイヤーの「集団 (Kollektiv)」概念について

この視点は先行研究においても欠けているように思われる。1989年での一連のマイヤー研究、2015年にバウハウス・デッサウで開かれたマイヤー展⁽³⁾や2018年のbauhaus imaginista. Moving Awayプロジェクト、2019年のハンネス・マイヤー論集の公刊⁽⁴⁾におけるように、マイヤーへの関心は今日著しく高まっているが、マイヤーの1920年代を「集団」を中心として連続的に通観するような視点はない。

先行研究のうち2015年の展覧会に注目したい。バウハウス・デッサウ財団のディレクター、クラウディア・ペレン (Claudia Perren) は同展の趣旨を示したテキストにおいて、マイヤー指揮下のバウハウス (以下、マイヤーが校長を務めた時期 (1928-1930年) のバウハウスを「マイヤー・バウハウス」とする) における「集団」を次のように特徴づけている。マイヤーはバウハウスを「作家建築家たち (Autor-Architekten) から事務共同体 (Bürogemeinschaft) へ」と換え、マイヤーの集団理解においては「さまざまな専門家たちの体系だった進行が重要であり、可能なかぎり多くの要素を建築造形プロセスに取り込む、という目的」があった。そして、バウハウスにおける集団 (Kollektive) においては「共働者の能力が異なれば異なるほど、チームの作業力は向上し、結果も価値あるものとなる」と考えられていた、とする⁽⁵⁾。

しかし、ペレンはマイヤー・バウハウスに注目するのみであり、20年代のマイヤーの活動を通観する視点がない。上の引用で明らかになったように、マイヤーがバウハウスで採った方法論、制度としての「集団」はそれ以前の時代から重要であったのであり、その連続性を明らかにしなければならないだろう。

本論文では以上の課題を解決するため、1920年代のマイヤーの活動を、(1) スイス・バーゼルの組合集合住宅であるフライドルフを設計し、そこで生活していた時期 (フライドルフ期: 1919-1925年)、(2) スイス・バーゼルで出版された建築雑誌、『ABC』に参与していた時期 (『ABC』期: 1926年)、そして、(3) バウハウスの建築科にマイスターとして就任し、校長を務めた時期 (バウハウス期: 1927-1930年) の三つの時期に分け、それぞれの時期に彼が書いたテキストから、彼の「集団」理解を読み取っていく。

1. フライドルフ期：1919 – 1925年

ここではマイヤーが設計し、1926年までマイヤー自身も住んでいたフライドルフ・ジートルンク (Siedlung Freidorf (1921年8月24日、落成式)、以下、「フライドルフ」) について書かれたテキストから、後の「集団」概念へとつながるような言説を取り上げる。

では、このフライドルフとはなにか。この集合住宅の施主はスイス消費協同組合全国連合会 (Verband schweizerischer Konsumvereine: VSK) であり、VSKは都市とは異なる、自給自足の生活空間＝村を供給することを目的としていた⁽⁶⁾。施主のこのような計画を具現化すべく、1914年より同組合員となっていたマイヤーが集合住宅の設計を行った。

マイヤーがフライドルフという集合住宅の設計を記述する中で強調していたのは建物とそこに住まう人、共同体の精神との一致であったが、マイヤーはそれらをどのように理解していたのだろうか。1926年までフライドルフで生活をしていたマイヤーは1925年にこう述べている。

「ここではすべてがコープ (Co-op) である。コープは協働 (Cooperation)を意味する。協働は組合を意味する。(…) 620の人々が共同して共同の地の共同の家に住む (bewohnen gemeinsam ein gemeinsames Haus auf gemeinsamer Erde)。」⁽⁷⁾

すなわち、マイヤーは組合という単一の共同体が共同の地で協働する場としてフライドルフを想定していた、といえるだろう。また、組合員である居住者はその地で同組合員との協働作業を通じて、いわば自給自足の共同体を実践していたことをマイヤーはみた。

このフライドルフの生活者をマイヤーは次のように述べる。

「その中にはあらゆる動物、愛玩犬と番犬、蜂の群れ、あひる、牡猫と雌猫、鶏とにわとり、亀、ウサギ、金魚、モペット、オルガン、織機、布団叩き、ドラムとカナリアの悪臭と喧騒がある。その中にはあらゆる世界思想があり、反体制

1920年代のハンネス・マイヤーの「集団 (Kollektiv)」概念について

派、禁欲者、人智学者、アスリート、利他主義者、サッカー選手、エゴイスト、コミュニスト、メソヂイスト、保守派、マツダ教信者、グルーサナー、菜食主義者、非喫煙者、そしてこうしたあらゆる方針の背教者たちがいる。その中には、新聞記者、製靴所の人、倉庫の借家人、植字工、階級の高いお役人、タイピスト、理論家、教育者、被教育者、生と、商人、売り子といったあらゆる民衆がおり、多くの販売物がある。子供、女性、成人女性、ご婦人がいる。」⁽⁸⁾

すなわち、マイヤーはこのフライドルフに、多種多様な職業、思想を持つ人からなる組合員たちが共同の地で、協働しているのをみた。これこそがマイヤーのみたフライドルフであり、そしてマイヤー自身もこのような協働生活を実践していた。

2. 『ABC』期：1926年

ここではスイスの生活協同組合の芸術大使としてバーゼルを中心に活動していた時期のマイヤーの「集団」を明らかにしたい。この時期にマイヤーは雑誌『ABC』に携わるメンバーらと交流することになるが、その中でもマイヤーと同様に「集団」に着目し、建築・造形活動を論じていた人がいた。それがマルト・スタム(マルト・スタム(Mart Stam, 1899-1986))だ。以下では、スタムとマイヤーの両者の制作論を比較し、両者の同異点を指摘する。スタムの場合は「集団的造形 (KOLLEKTIVE GESTALTUNG)」、「現代の建設 (MODERNES BAUEN)」を、マイヤーの場合は「新しい世界」を取り上げる。

(i) マルト・スタムの制作論と「集団」理解

スタムは『ABC』誌第一号の表紙に掲載された論文、「集団的造形」で「芸術家はエンジニアと並んでいる」、「造形する際にあらゆる表現は集団的な (kollektiv) 方法を用いる」⁽⁹⁾と述べているが、これは一体どういうことだろうか。

はじめにスタムは現代においては普遍的なもの、経済が優位にある、とし、芸術家とエンジニア、それぞれの役割を次のように整理する。エンジニアは「あらゆる領域

で科学によって経済的な相互作用を明らかにする最大効率を求め(…)材料の特質に理性的に取り組み、科学的に自身を適応させ、組み合わせを通じて新しい特質、新しい作用の方法を発見⁽¹⁰⁾する。他方、芸術家は「あらゆる対象において[全世界を支配する]この法則の本質を発見する必要がある、(…) [芸術家は]適切な材料を用いることを通じて適切な形の中へと造形する」⁽¹¹⁾。

すなわち、「経済」、「普遍的なもの」が優位に立つ現代において、合理的・経済的・科学的なエンジニアは「組み合わせ」によって「発見」をし、芸術家は「法則の本質を発見」し、「適切な形の中へと造形する」存在であった。そのような二者が時代の趨勢に合わせて並んでいる、とスタムは考えた。

このような芸術家・エンジニア観が建築の分野へと汎用されると、建設という制作プロセスでは、「気まぐれなもの、個人的なものは集団的なもの (kollektive)、規範的なものに」取って代わられた。そのような建設は「構築的に—組織づける (konstruierend-organisierend)」プロセスであった⁽¹²⁾。

このようにしてスタムは、現代において優位を占める「経済」、「普遍的なもの」という要求に応えるため、エンジニアと芸術家とによる「集団」を要請し、そのような建設は構築的な組織づけである、と特徴づけた。

(ii) マイヤーの制作論と「集団」理解

一方、マイヤーはどうだったのだろうか。

スタムと同様に、時代の要請に、その時代に固有の手段で応えることを第一の課題と見なしていたマイヤーは新しい時代を次のように述べている。我々の時代、新しい時代においては「協働 (Kooperation) が全世界を支配している。共同体が各人の本質を支配して」おり、さらに、「本来の共同体が有する確実な特徴は、同一の手段によって同一の欲求を満たすことである」。すなわち、各人はフライドルフで見られたような協働を通じて共同体、一つの集団へと還元される。さらにそのような集団へと還元される各人は国境とは無関係であるために「世界市民」となるのであった。それゆえに人々の欲求は同一であり、同一の手段で満たされる、というのである⁽¹³⁾。

また、マイヤーは「明白にわれわれの環境へと科学が浸透していること (…)

した認識は現行の価値を揺さぶり、その価値を変形させた」⁽¹⁴⁾と述べているように、新しい時代に科学が浸透し、あらゆる価値を変えた、という。

すなわち、マイヤーにおける制作論の課題は、「集団」の欲求を満たすこと、そして、新しい時代にはそれ固有の形式手段を求めたのであるから「科学」的、同一的な手段であること、であった。

では、そのような手段、芸術作品の制作手段とはどういったものなのだろうか。新しい時代において「我々の現実の環境を「芸術家」(Künstler)による解釈によって継続して「美化すること」(Verschönerung)は傲慢」であり、「我々の共同体意識は過剰な個人主義には耐えられない」⁽¹⁵⁾とするマイヤーは芸術作品の制作について次のように述べる。

「芸術家のアトリエは科学の実験室となり、そして、作品は鋭い思考と発見力の結果である。今日の芸術作品は、どの時代の産物とも同じように、我々の時代の生活条件に従属しており、そして、世界についての我々の思弁的な分析の結果は、より精密な(exakt)形式においてしか確立されえない。(…)新しい芸術作品は、集団的な作品であり、万人にとって規定的であり、各人の集合的对象でもないし、各人の特権でもない」⁽¹⁶⁾

すなわち、芸術作品はアトリエでの芸術家による美化の産物ではなく、科学の実験室での思考と発見力によって、すなわち、精密な形式で確立されるものとされた。そして、マイヤーにとって芸術作品は一個人に依拠せず「同一の手段によって[集団の]同一の欲求を満たす」、という意味で「集団的な作品」であり、科学の実験室内での精密な形式の産物という意味で、「万人にとって規定的」であった。

このような制作論をマイヤーは建築の領域にも適応する。

「建設は技術的なプロセスであって、美的なプロセスではない。(…)我々は、こうした[新しい]建築要素を、その目的と経済的な原則に適応させながら、構築的な統一へと組織している。」⁽¹⁷⁾

ここで新しい建築要素として挙げられているのはガラスや鉄筋コンクリートといった新しい素材、スタンダード化、規格化された部材である。それらを取り扱う「建設」というプロセスはもはや美的なプロセスではなく、「技術的」なプロセスであり、合目的・経済的でなければならず、建設の後に出来上がった建物は「構築的な統一」をもつ、という。

そのような構築についてマイヤーは次のように述べる。「純粋な構築は新しい形式世界の認識を示す。構築的な形式は父なる国を持たない。それは国際的であり、国際的な建築思想の表現である。国際性は我々の時代の特権である」⁽¹⁸⁾。すなわち、そのような構築こそが、新しいわれわれの時代にふさわしい建築における国際性の表現である、という。

ここでマイヤーの制作論と「集団」理解を整理する。マイヤーに従えば、新しい時代では「協働」が支配的であり、各人は協働によって国際的な共同体、「集団」へと還元されていた。その集団は国際的な集団であった。あらゆるものはその時代の要求に応え、その時代の手段で制作されなければならない、すなわち、新しい時代においては同一の手段で同一の欲求を満たさなければならない、と考えるマイヤーにとって、芸術作品もまた芸術家一人による個人主義的な産物ではなく、合理的・経済的・技術的、という意味で同一的、万人にとって規定的であり、そして、「協働」によって支えられた集団の要請に応える、という意味で集団的な作品であった。そうした制作論が建築へと応用されるならば、すなわち、マイヤーにとって「建設」というプロセスは、美的なプロセスではなく、合理的・経済的・技術的なプロセスとされ、建設の後にできあがった建物は構築的な統一をなすものであり、それは建築における国際性の表現であった。

ここでマイヤーとスタム、両者の制作論の同異点を確認する。スタムは、新しい時代においては時代が要請する普遍性、経済性に応えなければならない、として、それらを満たす能力に秀でた科学的なエンジニアと芸術家の二者からなる「集団」による制作という意味で「集団」的な方法、そのような「集団」による「構築的な統一」について論じていた。マイヤーは、芸術作品の制作も建設も新しい時代を支配し、「協働」

によって支えられる「集団」の要求によって規定されていると考え、そのような「集団」の同一的な欲求を満たす同一的な手段、合目的的で、経済的、技術的、そして科学的な方法について論じた。

両者は、作品の制作手段は時代によって規定される、という前提からその手段は合目的的、経済的、技術的、科学的である、としたことについては一致していた。そのような建設を経た建物を「構築的」な「統一」として記述している点でも一致していた。

しかし、その内実は異なっていた。スタムの見る時代は普遍性、経済性が支配する時代であり、集団とはエンジニアと芸術家による集団であった。他方、マイヤーのみ見る時代は協働、集団が支配する時代であり、その集団とは、フライドルフでの集団理解を踏まえれば、多種多様な人々からなる集団であっただろう。そしてそのような集団の欲求は同一的であることから、それに応じるための同一的な手段として合目的的、経済的、技術的、科学的な手段をマイヤーは要請した。

3. バウハウス：1927 – 1930年

ここでは、マイヤーが1927年にバウハウスに新設された建築科のマイスターに就任してから、バウハウスでの校長職を務めた1930年までの制作論と「集団」理解をみる。そのためにバウハウスの機関紙に発表されたテキスト、「建設 (bauen)」と「バウハウスと社会 (bauhaus und gesellschaft)」を取りあげる。

(i) 「建設」(1928)

機関紙『バウハウス』で発表したテキスト、「建設」でマイヤーは「建設」というプロセスを論じており、そこでの建築家の立ち位置についても言及する。

マイヤーは同テキストで新しい住宅は新しい建築部材が多用された「工業製品 (industrieprodukt)」である、として、住宅の「建設」について次のように述べる。

「そのようなもの [工業製品] としての新しい住宅は専門家たちの所産なのであ

る (ein werk der spezialisten)。(国民) 経済学者、統計学者、衛生学者、気候学者、経営学者、規格学者、暖房技術師。そして建築家 (architekt) は？ 建築家は芸術家 (künstler) であったが組織化の専門家 (spezialist) になる！ (…) それ [新しい住宅] は社会的な所産 (ein soziales werk) である、なぜならばそれは (あらゆる DIN 規格のように) 匿名の発明者共同体 (erfindergemeinschaft) の工業規格製品であるからである。」⁽¹⁹⁾

ここでは、住宅に限ったことではあるが、建築家は何か特権的なものが付与された存在ではなく、一専門家と見なされており、住宅は建築家をも含めた専門家たち、発明者共同体による社会的な所産とみなされていることがわかる。また、引用では省いたが、建設は労働を生み出すために失業を減らし、合理的な家政を促すことによって主婦の家事奴隷化を防ぐ、といった意味でも「社会的な所産」とされている。

マイヤーはこのような発明者共同体の工業規格製品としての住宅を建築 (Architektur) にも転用させ、プロセスとしての建設について次のように言及する。「[「芸術家の情緒の作用」としての建築]⁽²⁰⁾ は拒否され、「建設とはもはや野望ある建築家 (architekten-ehrgeiz) 一人の課題」⁽²¹⁾ ではなくなった。それに代わるのが「発明家と実践家とによる共同体活動」であり、「建設は各人の個人的な要件から (失業と住宅難によってますます強められように) 民衆同志の集団的な (kollektiv) 要件」⁽²²⁾ になった。

それゆえに、「他のマイスターの活動共同体において生のプロセスを自らモノにするマイスターその人だけがまさに……バウマイスター (baumeister) である」⁽²³⁾ と規定されているように、建築家は芸術家から、専門家としてのバウマイスターへと名前を変え、他のマイスターとの活動共同体を形成する一要員とされた

さらにはそのような建設は人間の生 (生活) に規定され、生を規定する、という意味で「生物学的な (biologisch) 事象」⁽²⁴⁾ でもあり、新しい時代の新しい建築部材を用いるという工業的性格から「技術的な事象」であり、各専門家たちによって作られた「機能ダイアグラムと経済プログラム」が「建築計画」の方針を定める、とされた⁽²⁵⁾。

こうした建設は、「これらの [新しい時代の] 建設要素をわれわれは経済的な原則

に従って、構築的な (konstruktiv) 統一へと組織する。(…) 生のプロセスの造形としてのこのような機能的—生物学的な建設の把握は首尾一貫性を伴って、純粋な構築 (konstruktion) へと通じている。(…) それは国際的な建築思想の現れである。国際性は時代の特権である」⁽²⁶⁾、と述べられているように、新しい時代にふさわしい構築へと通ずるものであった。

テキスト「建設」における「建設」を整理すると次のようになるだろう。「建設」とは従来のような建築家個人の課題ではなくなり、人間の生活に関わるという意味で生物学的なプロセスであり、新しい建築部材を取り扱う工業的性格から技術的なプロセスであり、建築労働者や主婦の社会的役割にも影響を与える意味で社会的な活動でもあり、建築家にとって代わり生のプロセスに通ずるバウマイスター、生物学や工業製品、経済に通ずる専門家たちによる共同体活動でもあった。これらを総じた意味で建設とは「集団的な (kollektiv) 要件」⁽²⁷⁾であった。

(ii) 「バウハウスと社会」(1929)

次に1929年に機関紙『バウハウス』にて発表した、詩の形式をとったテキスト「バウハウスと社会」でマイヤーは建設、ないしは造形活動、バウハウスの活動の対象を定めている。

同テキストはバウハウスという学校、すなわち、「造形高等学校 (hohe schule der gestaltung)」⁽²⁸⁾ (バウハウスは1927年に "Hochschule für Gestaltung" として認可) として、造形 (Gestaltung) は社会との関係においてどうあるべきか、を論じたものであるがしかし、「建設 (bauen) と造形 (gestalten) は一つの同じことである」⁽²⁹⁾ という記述や、建設がプロセス、ある種の制作論であったように、この「バウハウスと社会」で論じられている「造形 (Gestalten, Gestaltung)」もそのようなプロセスとして読むことができるだろう。

そのような造形の担い手である造形家の活動は、マイヤーによれば「社会的に条件づけられており、／われわれの課題の範囲を社会が決定する」のであり、そのような造形家は「この民衆共同体に仕える人である。／われわれ [造形家] の行いは民衆への奉仕」であった⁽³⁰⁾。

マイヤーにとってバウハウスの活動のターゲットは社会、それも民衆 (Volk) からなる社会であった。それゆえにマイヤーにとってバウハウスとは「民衆のための集団 (Kollektiv für das Volk)」⁽³¹⁾ であった。

4. 結び

本論文の目的はマイヤーの1920年代の活動を「集団」という概念で整理し直すことであった。上で分けた3つの時期については次のように言えるだろう。(i) フライドルフの時期では「集団」へとつながるような「協働」が見出された。その「協働」は狭義ではさまざまな職種・思想の組合員同士の「協働」であり、そのような「協働」によって成り立つ共同体の生活に適合した建物を設計し、マイヤー自らも「協働」を実践していた。(ii) 『ABC』期、「新しい世界」でマイヤーは、芸術作品はその時代の要求に応えるように、そして、その時代的手段で制作されなければならない、すなわち、「集団」の同一的な要求に応えるように、同一的な精密な形式で制作されるべきである、という前提のもと、芸術作品の制作論、建築における「建設」というプロセスについて論じていた。その「集団」とは「協働」からなる「集団」であり、芸術作品の制作、建設とは、同一的な集団の要求に応える合理的・経済的・技術的、科学的な手段という意味で同一的な手段、プロセスとされていた。「集団」については『ABC』誌の設立者であるスタムにも狭義では異なっていたが同じ語が用いられ、時代にはそれ固有の形式手段をという前提や、建設を構築的統一と記述していた点などでは類似していた。(iii) バウハウス期では、生物学的、技術的、社会的なプロセスとしての建設は、それらに通ずる専門家たちによる活動であり、集団的な社会に影響を及ぼす、という意味で「集団」的な要件であった。芸術家としての建築家は一専門家となり、他の専門家と並ぶ、とし、いわば建築家 (Architekt) の地位を下げた点ではスタムの「現代の建設」との類似が見られるだろう。そしてバウハウスの活動のターゲットを民衆へと定め、バウハウスは「民衆のための集団」とマイヤーは呼んだ。

以上のことから、1926年以降に顕著に見られた「集団」は「協働」が基になって

いる、といえるだろう。なぜならば、フライドルフ期では「協働」を設計・実践し、『ABC』の時期、「新しい世界」で見られた「集団」とは「協働」によって成り立つ「集団」であり、バウハウスの時期で論じられた建設というプロセスは専門家たち「協働」からなる「集団」のプロセスといえるであろうだからだ。さらには造形のための学校であるバウハウスも、当初より複数の工房からなる共同体を目指していたのではあるが、複数の工房、学生・マイスターらによる「協働」に基づいた「集団」でもあったといえるだろう。すなわち、マイヤーは協働を重視する者という意味で「集団主義者 (kollektivist)」⁽³²⁾であり、マイヤー自身の授業ないしはバウハウスの活動も「集団主義的 (kollektivistisch)」⁽³³⁾であった。それゆえに、マイヤーの関心は常に「協働」による「集団」の活動にあるために、マイヤーの提示する「バウハウスの組織図」(1930)の基軸は「活動 (werk)」であった、と読めるであろう。

註

- (1) Hannes Meyer, "Aus dem Briefwechsel mit Walter Gropius" (1927a), in Lena Meyer-Bergner (Hrsg.), *Hannes Meyer; Bauen und Gesellschaft; Schriften, Briefe, Projekte*, Verlag der Kunst Dresden, 1980, S. 42. [原文すべて小文字]
- (2) Ebd., S. 44.
- (3) Werner Möller, Tim Leik (Hrsg.), *das prinzip coop - Hannes Meyer und die Idee einer kollektiven Gestaltung*, Spector Books, 2015.
- (4) Philipp Oswalt (Hrsg.), *Hannes Meyers neue Bauhauslehre: Von Dessau bis Mexiko*, Birkhäuser, 2019.
- (5) Claudia Perren, "Das Kollektiv des Hannes Meyer" in Möller, Leik (Hrsg.), 2015, S. 5/6.
- (6) Mathias Möller, "Selbsthilfe im Wohnbereich-das Beispiel der Siedlungsgenossenschaft Freidorf", in Patrick Oehler, Nicola Thomas, Mathias Drilling (Hrsg.), *Soziale Arbeit in der unternehmerischen Stadt*, Verlag für Sozialwissenschaften, 2016, S. 75-88.
- (7) Hannes Meyer, "Siedlung Freidorf. 1919-1921" (1925) in *Das Werk*, 12. Jg., Heft 2, 1925, S. 42 in Martin Kieren, Claude Lichtenstein (Hrsg.), *Hannes Meyer, Architekt 1889-1954 Schriften der zwanziger Jahre*, Verlag Lars Müller, 1990. (岩澤龍彦訳「フライドルフ・ジートルンク (1925)」、『生田哲学』第20号、専修大学哲学会、2018年、57-66頁 [一部本論に合わせて訳を変更した])

- (8) Ebd., S. 50.
- (9) Mart Stam, "KOLLEKTIVE GESTALTUNG", in *ABC*, Heft 1, 1924, S. 1/2.
- (10) Ebd., S. 1.
- (11) Ebd., S. 2.
- (12) Mart Stam, "MODERNES BAUEN" in *ABC*, Heft 2, 1924, S. 4 より引用。
- (13) Hannes Meyer, "Die neue Welt" (in *das Werk*, 13 Jg., 1926, Heft 7, S. 205-224) in Meyer-Bergner (Hrsg.), 1980, S. 28-30. (伊藤博明・岩澤龍彦訳「新しい世界」、『生田哲学』第19号、専修大学哲学会、2017年、92-105頁 [一部本論に合わせて訳を変更した])
- (14) Ebd., S. 27.
- (15) Ebd., S. 31.
- (16) Ebd.
- (17) Ebd., S. 29.
- (18) Ebd., S. 30.
- (19) Hannes Meyer, "bauen" (in *bauhaus, Zeitschrift für Gestaltung*, 2 Jg., Heft 4, 1928a, S. 12-13) in Meyer-Bergner (Hrsg.), 1980, S. 48/49. [原文すべて小文字]
- (20) Ebd., S. 47.
- (21) Ebd., S. 49.
- (22) Ebd.
- (23) Ebd.
- (24) Ebd., S. 47.
- (25) Ebd., S. 49.
- (26) Ebd., S. 47.
- (27) Ebd., S. 49.
- (28) Hannes Meyer, "bauhaus und gesellschaft" (in *bauhaus, Zeitschrift für Gestaltung*, 3. Jg., Heft 1, 1929, S. 2) in Meyer-Bergner (Hrsg.), 1980, S. 50.
- (29) Ebd.
- (30) Ebd., S. 50.
- (31) Hannes Meyer, Handschriftliche Notiz zur Antrittsrede (BHA GS 8/4) (1928b) (in Klaus Jürgen Winkler, *Der Architekt hannes meyer: Anschauungen und Werk*, Verlag für Bauwesen Berlin, 1989, S. 113).
- (32) Meyer (1927a), in Meyer-Bergner (Hrsg.), 1980, S. 42.
- (33) Ebd., S. 44.